ロマン派の音楽(#2)

今回取り上げる4人の作曲家は、ロマン派初期から盛期の代表的な作曲家です．広く活躍し、音楽を開拓し、実績を残しています．

初期ロマン派(1800〜30)
- Carl Maria von Weber(1786 – 1826)
- Franz Peter Schubert(1797 – 1828)

盛期ロマン派(1830〜50)
- Felix Mendelssohn Bartholdy(1809 – 1847)
- Robert Schumann(1810 – 1856)

Carl Maria von Weber(1786 – 1826)

W. A. Mozartが作ったドイツオペラの伝統を継承し、”魔弾の射手”ではドイツロマン派のオペラ様式を作り出し、音楽の響きは現代的で、ドイツ音楽の一つの典型的な響きとなっています．WagnerがWeberの音楽感を引き継いでいます．Mozartの妻Constanze (旧姓Weber)は父方の23歳年上の従姉です．

1. Carl Maria von Weber : **Der Freischütz Ouvertüre** 魔弾の射手 序曲

指揮 : Myung-Whun Chung
Teatro alla Scala / Filarmonica della Scala
October, 2017

ドイツの民間伝説に登場する、”意のままに命中する弾＝自在の弾(Freikugel)”を所持する射撃手(Schütz)から魔弾の射手(Freischütz)となります．この歌劇は民話に題材を求めていることも含めドイツのロマン主義に正面から取り組んだ作品で、記念碑的な作品となっています．

“魔弾の射手”の序曲は、本編の物語の流れに沿って主要な動機や主題を取り入れています．この手法は、後のWagnerのLeitmotivに繋がります．

ロマンティック・オペラ (Romantische Oper)

19世紀のドイツで、18世紀ドイツのSingspiel(ドイツ語による歌芝居や大衆演劇形式)の伝統からではなく、フランス革命期のフランスのopéra comique (歌以外の対話に地の台詞を使うオペラ)からの強い影響を受け発展し、ロマンティック・オペラと呼ぶオペラの分野が生まれます．フランスの影響から器楽は絶技巧的になり、イタリアの影響から劇的な旋律となり、話の内容は大衆文学からとなります．イタリアの作曲家Vincenzo Bellini (1801 – 1835)や、Gaetano Donizetti (1797 – 1848)が、人気を集めています．

ロマンティック・オペラではオーケストラ器楽の役割は重要になります．回想の場面でMotivに器楽を使い回想の効果を出します．場所や人、考えのように抽象的な事にでもMotivを与え、回想の場面で使い、視覚で見えるような効果を演出します．

Carl Maria von Weberの “魔弾の射手”(1821)がロマンティック・オペラのはじまりとされています．後にはドイツ特有のスタイルと結びついて行きます．テーマは自然、超自然、中世からの伝承をはじめとする大衆文化に向いていきます．音楽的には、ドイツ民謡に発想を受けています．

ロマンティック・オペラは、R. Wagnerの初期の作品、”さまよえるオランダ人” (1843)、“タンホイザー” (1845)で頂点に達します．Wagnerは回想のMotivを発展させ “Leitmotiv” (示導動機)として楽劇に結びつきます．

2. Carl Maria von Weber : **Klarinettenkonzert Nr. 1 in f-Moll op.73 J.114**

solo : Jörg Widmann
WDR Sinfonieorchester (Westdeutscher Rundfunk) Köln, ケルンWDR交響楽団
Kölner Philharmonie / 2019.09.28
抜粋　**I. Allegro**

クラリネット協奏曲第1番 f-Moll op.73は、1811年に作曲しています．Münchenの宮廷管弦楽団のクラリネット奏者 Heinrich Joseph Bärmann (1784 – 1847)のために書いています．
1811年4月5日、WeberのKlarinette小協奏曲(Concertino für Klarinette) in Es-Dur, op.26, J.109をMünchenにおいてBärmannの独奏で初演し、これを聴いたBayern国王Maximilian I世は感動し、新たに2曲の協奏曲の作曲をWeberに依頼します．これで作曲された最初の曲が、この協奏曲第1番です．

この第1楽章は当時としては革新的です．後のMendelssohnの様な作曲家の特徴を予見する様式です．正に同じ年1811年に作曲されたピアノ協奏曲第5番が、この時期の普通の例と言えます．Weberはチェロが第1主題を演奏し、次に全体で演奏し、violinが旋律を拾いながら徐々に静かになり、solo Clarinetto に引き継いでいます．独奏は“con duolo“(寂しく)と書かれた切ない歌から始め、この主題を変奏しはじめます．独奏楽器が演奏する主題を、第1主題としてオーケストラが演奏し始めるのが一般的ですが、この協奏曲では、独奏が演奏する第2主題をオーケストラが演奏し始める第1主題が導く構成になっています．独奏楽器の演奏する主題は独奏楽器が初めて演奏し、第1主題は序奏という位置付けになります．

第1主題と第2主題は音楽が進むにつれ、対比したり融合したりしながら劇的に協奏曲を演出しています．

Franz Peter Schubert(1797 – 1828)

ロマン派の作曲家ですが、Wien古典派の特にBeethovenの影響を強く受けています．貴族社会の作曲家ではなく市民社会の作曲家という点ではロマン派的ですが、Schubertの短い一生はBeethovenの後半に重なり、時として、音楽的には後期Beethovenより古典的な面さえ見せます．

同時期で、古典派的な様式を持ちながら、初期ロマン派とされる作曲家、Carl Maria von WeberとSchubertは、ともに独語詞に拘っています．Weberは独語のオペラを確立し、Schubertは500曲を超える独語歌曲を残しています．Schubertは国民的、民族的な詩の独語の言葉に、最もふさわしい音楽をつけ、ロマン派的な歌曲を作り始めています．

Schubertは幼いころからFranz Joseph Haydn, Johann Michael Haydn兄弟、MozartやBeethovenの音楽に家族でもKonvikt(寄宿神学校)でも親しんでいます．SchubertはMozartとBeethovenの音楽を身近に感じ、尊敬、畏敬の念をもって触れ、様々な作品についてSchubertの感想が残っています．(Joseph von Spaun (1788 – 1865)の回想文等)

Schubertの歌曲、交響曲のような器楽曲ともに後継の音楽家に大きな影響を与えています．Schumann, Mendelssohnを含め、以降の音楽家もSchubertの作品を研究しています．

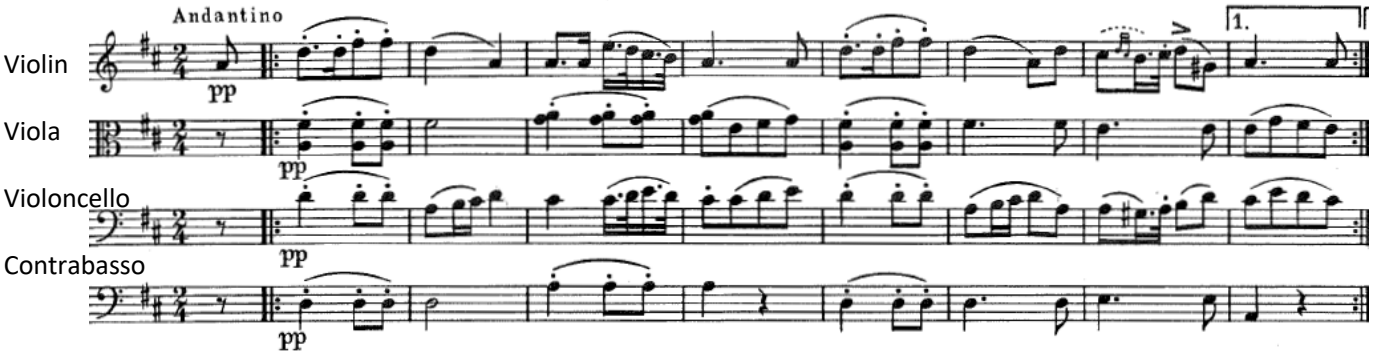
3. Franz Schubert : **Das Forellen Quintett (Trout Quintet) A-Dur op.114, D.667**
IV. Andantino - Allegretto

Violine : Noah Bendix-Balgley, Bratsche : Máté Szűcs,
Violoncello : Bruno Delepelaire, Kontrabass : Matthew McDonald
Klavier : Yannick Rafalimanana
Berlin Philharmonie Kammermusiksaal - 19.09.2017 より第4楽章を抜粋

ピアノ5重奏曲 “鱒” D667は、第4楽章が歌曲 “鱒(Die Forelle)”, op.32 D550 (1817)を主題とした変奏曲となっています. 作品全体の主要な主題も素材的に『鱒』の旋律と関連付けられています.

第4楽章の構成

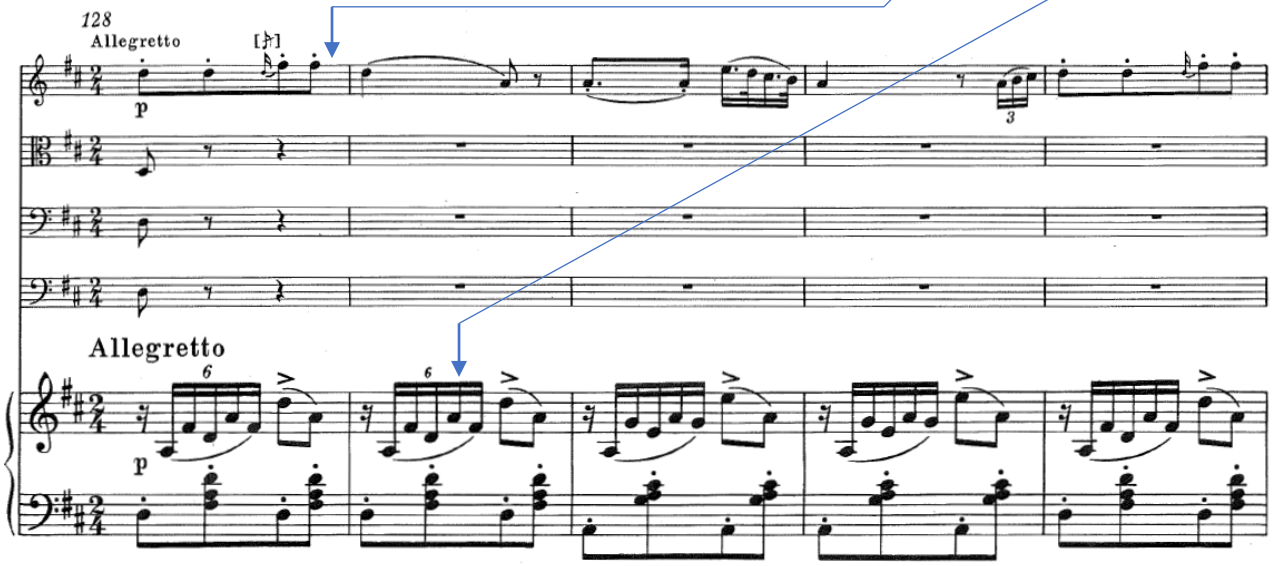
1. 主題の呈示 Andantino D-Dur, 弦楽4重奏が “鱒” の主題を呈示します.



2. 変奏1 : 主題はPiano、弦楽は水の流れを表すような装飾します.

3. 変奏2 : 主題は中低弦、Pianoはエコー的に応え、Violinが速く技巧的な装飾にまわります.
4. 変奏3 : 主題は低弦、Pianoは細かな装飾にまわります.
5. 変奏4 : 調性をd-Mollに移し、全楽器で主題を変奏します.

6. 変奏5 : 調性をB-Durに移し、主題はViolonceloが雰囲気を変え、これにPianoが応えます. Pianoが伴奏に加わり、ViolonceloにViolinが応えます.
7. 変奏6 : Allegretto D-Durに移ります. この変奏は元の歌曲に似せ、主題と特徴的な伴奏の音形を、Violin, Violoncello, Pianoに移しています.



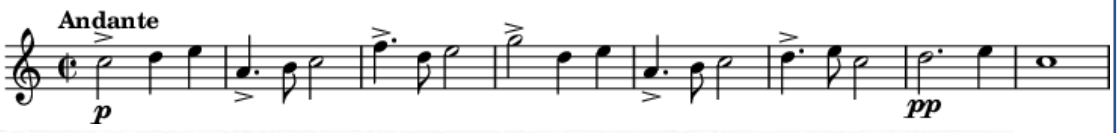
Schubert の変奏曲は Beethovenの変奏曲と比べて、元の主題の音形を大きく変化させていません. 旋律の装飾は雰囲気を変える範囲に留まっています. 第1変奏から第3変奏では主題が異なる楽器もしくは楽器群に移ります. 第4変奏では平行調のd-Moll、第5変奏では調性を3度下の下中音(Submediant)のB-Durに移し、第6変奏で元のD-Durに戻る連鎖を作っています.

4. Franz Schubert : **Sinfonie Nr. 8** C-Dur D 944 **;** “die große C-Dur" Sinfonie

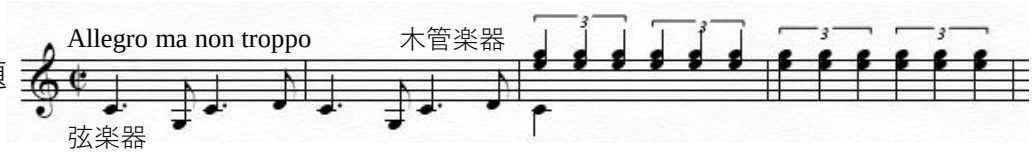
I. Andante - Allegro ma non troppo

この第1楽章は、序奏(Andante)が付いた主部(Allegro ma non troppo)となっています.
序奏はHornの主題から始まります. この主題は、短い序奏の中で、呈示、展開、再現という形で変化します. 主部はソナタ形式になっています. 序奏の主題を3番目の主題として使っています.

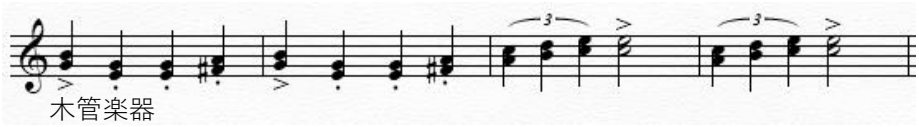
序奏 主題



主部 第1主題



第2主題



Dirigent : Herbert Blomstedt
NDR Elbphilharmonie Orchester : NDR(北ドイツ放送), 旧Humburg北ドイツ放送交響楽団
11. Dezember 2020, Elbphilharmonie Hamburg

“Die große”の呼び名について : SchubertのC-Dur の作品は、第6番と第8番があり、
第6番(D.589)の方が小規模でDie kleine C-Durと呼び、第8番(D.944) をgroßeと呼んでいます.

埋もれていた Franz Schubertの交響曲

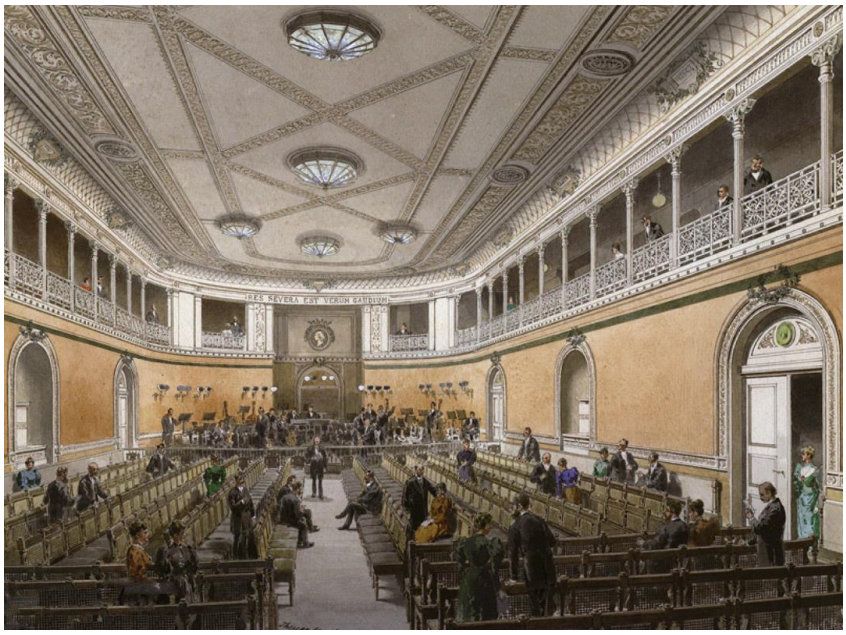
Schubertの交響曲第8番 C-Dur D 944 “große“について
完成直後の1826年、Schubertは同曲の楽譜をWien楽友協会へ献辞を添えて提出しています. 僅かな謝礼を得ていますが、演奏困難を理由に演奏されていません.

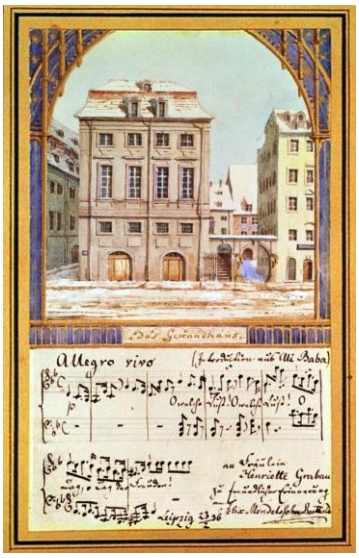
Franz Schubert(1797 – 1828)の死後、1839年にSchumannが、忘れ去られていたSchubertの自筆譜を見つけ出し、世に知らせます. 1838年にSchubertの墓を訪れたSchumannは、同年1月1日にWienのSchubert宅を訪れるます. この時まで、Schubertは歌曲や室内楽、ピアノ曲などを作曲する作曲家という認識しか持っていませんでした.
Schubertの部屋を管理していた兄Ferdinandは、Schubertの死後、机をそのまま保管していました. Schumannは、机の上にあった長大な交響曲を発見し驚愕します. Schumannは、この作品を演奏すべく、楽譜をLeipzigの盟友Mendelssohnに送りたいとFerdinandに許可を貰いMendelssohnに楽譜が届けられています.

1838年3月21日、Mendelssohnの指揮、Gewandhausorchester Leipzigの演奏によって、この交響曲は初演されています. Schumannは初演には立ち会えず、翌年の再演でようやく聴いています.

その他の埋もれていた作品
1867年にWienを旅行した英国のSir George Grove (1820 – 1900)とSir Arthur Seymour Sullivan (1842 – 1900)の2人が、7曲の交響曲、Rosamundeの音楽、数曲のミサ曲とオペラ、室内楽曲数曲、膨大な量の多様な曲と歌曲等を発見しています．最終的にはLeipzigのBreitkopf & Härtel社から出版されています．

Gewandhausについて　1代目のGewandhaus





Mendelssohnによる水彩画、歌手Henriette Grabauに贈呈

この建物は、1498年にLeipzig旧市街のKupfergäßchen (現在のKupfergasse, Thomas教会とLepzig大学の間)に武器庫として建てられ、1階が織物や羊毛商人の見本市として使用され、建物全体がGewandhaus (織物会館)と呼ばれるようになりました．また、通りの名前になっている銅の交換場所もこの建物の中にありました．初代Gewandhausが手狭になり、1884年12月11日、旧市街の南西 Grassistraße/Beethovenstraße に2代目Gewandhausが落成します．1944年2月に空襲で被害を受けます．1977年11月8日、現在のAugustusplatzに3代目のGewandhausが起工し1981年に落成します．

2代目Gewandhaus
Grassistraße/Beethovenstraße : 現在、Leipzig大学のGeisteswissenschaftliches Zentrum (GWZ, 人文科学センター)が建っています．

3代目Gewandhaus
Augustusplatz

ロマン派の音楽(#2)

Felix Mendelssohn Bartholdy (1809 – 1847)

5. Mendelssohn: **Ouverture “Die Hebriden”**, Op. 26
Orchestre national de France (フランス国立管弦楽団)
指揮 : Neeme Järvi

2019/01/24 Auditorium de la Maison de la Radio

Mendelssohnの20歳の誕生日を祝ってドイツ人貴族の招待にあずかり、England, Scottlandを旅行し、Fingalの洞窟のあるHebriden諸島も訪れています．この曲の印象を得ています．序曲となっていますが、単独で完結し、物語性はありません．光景と心象を描き出し、描写的な標題音楽となっています．翌年1830年に完成しています．

3つの主題で構成しています．第1主題は、Viola, Violoncello, Fagottoが呈示します．情緒的な主題で、洞窟の力強さ、孤独感を想起するような拡がりのある美しい情景を描いています．第2主題と第3主題は、海の動きや波と広さを描写しています．

無言歌 (Lieder ohne Worte)
無言歌集として出版 op.19, 30, 38, 53, 62, 67, 85, 102 の各6曲全8集あります．
第1巻 (1832)は当初 “ピアノのための旋律” とされ、第2巻 (1835)以降を”無言歌”としています．第3巻から第6巻は1837年から1845年の間に出版され、第7巻と第8巻はMendelssohnの死から数年後に出版されています．姉の Fanny Mendelssohn-Henselが無言歌を考案したとされています．彼女自身も多くの無言歌や性格的作品を残しています．また、上記48曲の他、未出版の作品も出版されています．

Mendelssohnの無言歌は、物語の雰囲気、語る内容、判りやすい抒情的な旋律、明確な形式が特徴です．歌いやすい旋律が一貫した伴奏と共に演奏されます．形式は 3部構成の歌唱形式に従い、部分間の対比を意図する試みは見あたりません．

性格的小品(作品, 独: Charakterstück)は、ロマン派およびその前後の時代に、自由な発想のピアノ小品を指しています．全48曲にはそれぞれ表題が付いていますが、自身による表題は3曲のVenetianisches Gondellied(Veneziaの舟歌) op19-6, 30-6, 62-5, Duett op.38-6, Volkslied op.53-5の5曲だけです．

6. Mendelssohn : **Lieder ohne Worte** op. 19 No.1 in E-Dur
Klavier : Roberto Prosseda
Yale University, Morse Recital Hall in Sprague Memorial Hall.
February 13, 2019. Horowitz Recital Series.

Mendelssohn: **Lieder ohne Worte, op.19 No.6 in g Moll, "Venetianisches Gondellied“**
Klavier : Jan Lisiecki
Deutsche Grammophon 2019/02/06

9. Mendelssohn: Sinfonie Nr.4 in A-Dur "Italienische", op.90 / IV. Saltarello. Presto
Tonhalle-Orchester Zürich
指揮 : Paavo Järvi ★時間があれば最後に見ます★
2021/03/19 Tonhalle Maag, Zürich

ロマン派の音楽(#2)

Robert Alexander Schumann (1810 – 1856)

7. Robert Schumann : 連作歌曲集(Liederkreis) **“詩人の恋 Dichterliebe”**, Op 48 から
1. Im wunderschönen Monat Mai 美しい五月には
Bariton : Dietrich Fischer-Dieskau
Piano : Vladimir Horowitz (Carnegie Hall)

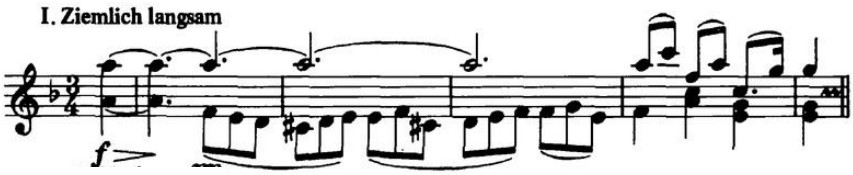
Im wunderschönen Monat Mai,	素晴らしく美しい五月に
Als alle Knospen sprangen,	すべてのつぼみが開く時
Da ist in meinem Herzen	私の心の中で
Die Liebe aufgegangen.	恋の芽が開く
Im wunderschönen Monat Mai,	素晴らしく美しい五月に
Als alle Vögel sangen,	すべての鳥が歌う時
Da hab ich ihr gestanden	僕は彼女に告白する
Mein Sehnen und Verlangen.	僕の憧れと想いを

8. Robert Schumann : **4. Sinfonie in d-Moll** op. 120

第1楽章 Ziemlich langsam 冒頭
第2楽章 Romanze, Ziemlich langsam(かなり緩やかに)

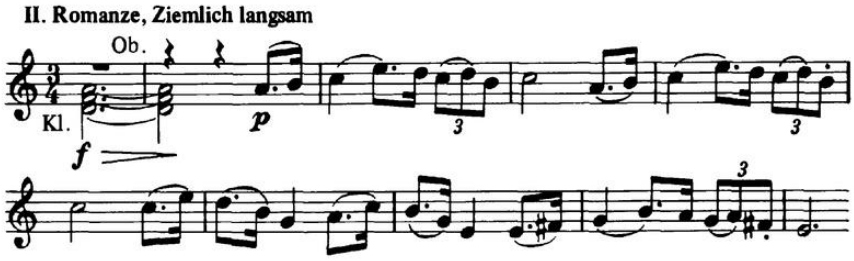
hr-Sinfonieorchester – Frankfurt Radio Symphony
Marek Janowski, Dirigent
hr-Sinfoniekonzert
Alte Oper Frankfurt, 23. November 2018

第1楽章
序奏部　動機



第2楽章　a-Moll, 3/4拍子, 三部形式
OboeとViolonceのの独奏の第1主題に続き、
第1楽章の序奏の動機を第2主題の様に使います.

第1主題



中間部はViolinの独奏に、3連符が印象的に使われます.

Solo violin

1st. violin

Schumannの管弦楽法への批評について

Schumannの交響曲はピアノ曲と比べ、管弦楽法について批判があり支持されていない例があります. 楽器使いに色彩的が明快でない、といった批評が多くあったようです.
G. Mahlerをはじめ、Schumannの交響曲の楽器使いに修正を加えた演奏があります. 近年、作曲の原典を尊重し、手を入れる例は稀となっています. 門馬直美氏は、この様な扱い方について「未熟さがあるからだといわれることが多いが、逆に言えば、そこにSchumannの味があり、特色がある」としています.

指揮者の理解不足、演奏者の未熟さによる誤った見解があったように思います. 事実、門馬氏の言葉通り、原典による現代の演奏に特別に幼稚であるなどの違和感はなく、Schumannらしい緊張感と見ることが出来るからです.

確かにPiano奏者系の作曲家の作品に、明らかに間違った楽器使いという例はあります.
当時の周囲の音楽家からの指摘などを受け、作曲家自身が作品に校訂する例もあります.
その様な作曲時期の経緯、その後どの演奏方法が選ばれるかの経緯を含めて、音楽の選択、選別の問題です.

ただ、当時の事情を考えると、ロマンティック・オペラを通じ器楽を重要視し、技巧的な器楽音楽を好んだ傾向が、影響していた可能性はあります.

ロマン派音楽　中期から後期について

ロマン派音楽の器楽の技巧的な傾向を象徴しているのが、Franz LisztのPiano recital の人気です. 鉄道や蒸気船により旅がしやすくなると、LisztやChopinの様なPianoの名手は、演奏旅行の回数を増やし、国際的な聴衆を獲得していきます.

そして、1830年代から1840年代にかけて、Robert Schumann, Giacomo Meyerbeer (1791 – 1864), Giuseppe Verdi (1813 – 1901)らがロマン派音楽の最盛期を作ります.

後期ロマン派音楽 (1850 –)

半世紀にわたる楽器の改良

Violin, Violaの顎当て、Valve式の金管楽器、Pianoのaction の二重 Escapement(ハンマーの速い動きを実現する構造)、新奇なものから標準的なものへ

音楽院や音楽大学が設立

Conservatoire de Paris　(1795)
Universität für Musik und darstellende Kunst Wien (1812)
Royal Academy of Music (1822)

独墺圏のLisztやWagnerが後期ドイツ・ロマン主義に大規模な楽劇や交響詩を書いています.
Wagnerが1850年以降に完成した楽劇は、和声法や管弦楽法、音楽語法や芸術発想などで、独墺圏、仏、伊、東欧、北欧諸国など全欧州に影響を与えます.

交響曲では Joseph Anton Bruckner (1824 – 1896), Gustav Mahler (1860 – 1911)
楽劇、交響詩では Richard Georg Strauss (1864 – 1949)
歌曲では Hugo Wolf (1860 – 1903)
に大きな影響を与え、更に発展させています.

楽器の発展

ロマン派の初期から中期にかけて、**金管楽器**(Horn, Trumpet, Tuba)にValveが付き始めます.

WeberのDer Freischütz	初演1821年6月18日BerlinのSchauspielhaus
Beethovenの第九は	初演1824年5月7日にWienのKärntnertor劇場
MendelssohnのHebriden	1830年12月16日完成, 初演1832年5月14日にLondon　微妙な時期

<u>Valve機構の製作側の状況</u>

Piston valve	François Périnet	c.1820
Rotary valve	Joseph Riedl in Vienna	c.1832
Wienna valve	Leopold Uhlmann	c.1830

J. Hotteterre

T. Böhm

木管楽器の発展には、17世紀(Baroque時期)と19世紀のModern化の2段階あります.

Flute

1680年頃フランスのルイ14世の王宮で**Jacques-Martin Hotteterre** (1674 – 1763)一族が、Flute(横笛)とoboeを改良しています.

1833年、バイエルン王国の宮廷で、ドイツのFlute奏者で製作者の**Theobald Böhm** (1794 – 1881)は、1833年**ベーム式**フルートを開発しています.

Oboe

19世紀、<u>Triébert一族</u> (父親Guillaume Triébert (1770–1847)、兄Charles Triébert (1810 – 1867)、弟 Frédéric Triébert (1813–1878))による**Conservatoire式**(フランス式)が一般に拡がります.
ドイツ式は**ウィーン式**として現在でも使われています.

Clarinetto

Böhm式 (フランス式) 最も一般的な方式. 1843年にフランスのL. A. BuffetとH. E. Klosé によって、1832年のベーム式フルートを応用して開発しています.

Öhler式 (ドイツ式) ドイツの Oskar Öhler (1858 – 1936)が、1812年頃から使われていた13本のキー付きのI. Müller式とBöhm式のクラリネットを改良し開発しています(c.1900). 音色が良く、特にドイツのクラシック演奏者は好んで使っています.

Fagotto

Flûte traversièreとBaroque oboeを作り出した J. Hotteterreは1650年代にbassoonを4つの部分に分け改良したとされています.

Heckel (ドイツ式)

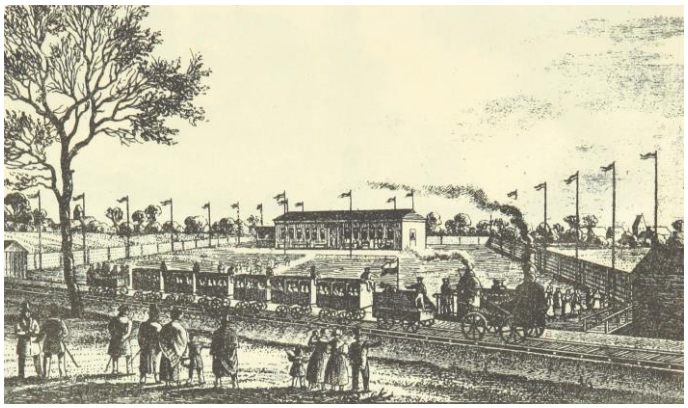
Carl Almenräder (1786 – 1843) ドイツの演奏家が、ドイツの音響研究家 Jacob Gottfried Weber (1779 – 1839)の協力を得て、4 octaveの音域を持つ17本のキーを用いたFagottoを開発します.
1823年から開発を始め、1831年Almenräderは独立し、<u>Johann Adam Heckel</u> (1812 – 1877)と自身の製作工房を始めています. 1846年に死去するまで楽器の発表と製作を続けています.
Beethovenもこれら開発のことを聞いて、新しく作られた楽器の一つを購入しています.

Buffet (フランス)式

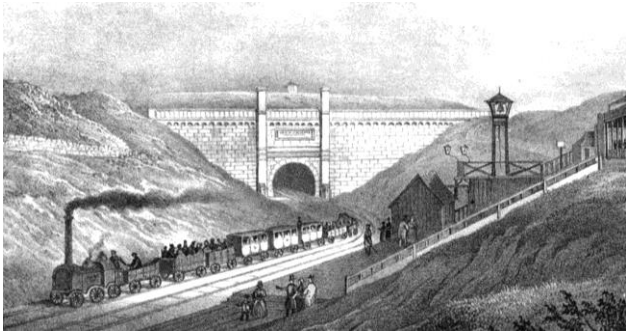
保守的な形で発展を続けたBuffet式は、主にキー機構の改良を続け、音程、音色の一貫性、操作のしやすさ、パワーの向上は得られていません. 現代のBuffet式は22のキーを装備し、音域はHeckel式と同じです. Buffet式はBuffet Crampon S.A.S, Ateliers Ducasseが製造を続けています.

蒸気機関鉄道　1837年以降

ドイツでは蒸気機関による列車について、早い時期から要求は鉱山などでありました. 蒸気機関については、英国に先を越された感はあるのですが、充分な技術は備えていたようです. 英国のLiverpool and Manchester Railway (1830年)より遅れて、1835年12月7日、ドイツ最初の鉄道Bayerische Ludwigsbahn (Nuremberg 〜 Fürth)が運営を開始しています.



1837年4月24日 Leipzig – Dresden 鉄道で
最初の蒸気機関車を運用開始



Oberauer Tunnel, um 1840

王立Sachsen邦有鉄道

1866年の普墺戦争の勝利、1870年の普仏戦争の勝利を経て、1871年のドイツ統一により、連邦国家であるドイツ帝国が成立します. 鉄道については中央政府による一元運営ではなく、連邦国家を構成する王国や大公国毎に運営されることとなります.

王立Sachsen邦有鉄道: Königlich Sächsische Staatseisenbahnenは、1869年から1918年までSachsen王国で運営されていた国有鉄道です. 1918年から1920年にドイツ国営鉄道(ドイツ国鉄)に統合されるまでは、”王立(Königlich)” が外れて単にSachsen邦有鉄道 (Sächsische Staatseisenbahnen)と呼ばれます.

初期の鉄道

1839年に民間資金によるLeipzig – Dresden 鉄道が完成した後、Sachsen議会も鉄道建設に関与し始めます. 早い段階で Bayern, Bohemia, Szilézia への鉄道が必要であり、王国を南北に走る鉄道が必要であると認識しています. この計画の資金は、民間資金による鉄道委員会の手に委ねられます. 一方、政府は適切な政治的・法的判断を行うことになります. 1841年1月14日、LeipzigとHofの間の鉄道ルートの建設について、Bayern王国とSachsen-Altenburg公国との間で条約を合意します. 1841年6月22日にSächsisch-Bayerische鉄道会社が設立され、1842年9月19日にLeipzigとAltenburgの間の鉄道が運営を開始します.

建設費が計画の限度を超え、合意を履行するために国の予算で建設を完了することになります. 1847年4月1日、Reichenbach im Vogtlandまで完成した鉄道路線が国有に移管されます. この時、同時にLeipzigに設立された王立Sächsisch-Bayerische邦有鉄道の管理局 (Königlichen Direction der Sächsisch-Bayerischen Staatseisenbahn) が業務を始めています.

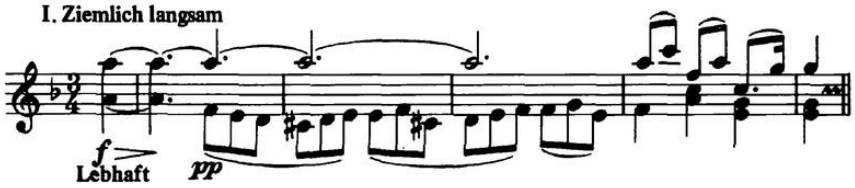
Leipzig–Dresden鉄道の
急行列車、1900 年頃

ロマン派の音楽(#2)

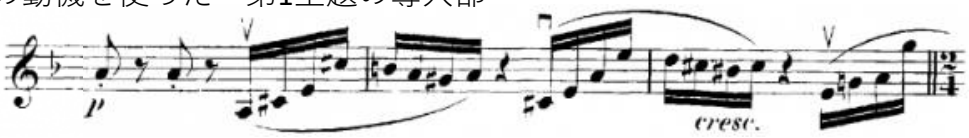
Robert Schumann : 4. Sinfonie in d-Moll op. 120　楽章間の主題および動機の共用

第1楽章　Ziemlich langsam

序奏部　低弦の動機

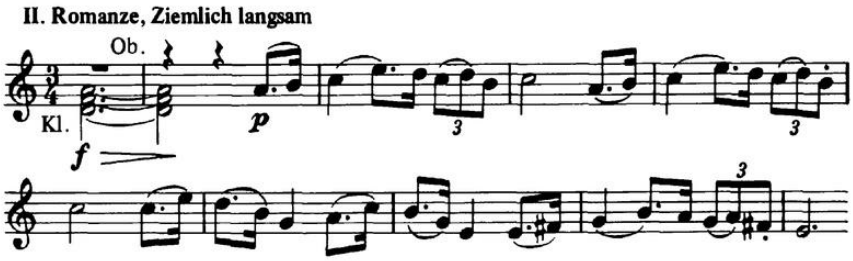


第1主題の動機を使った　第1主題の導入部

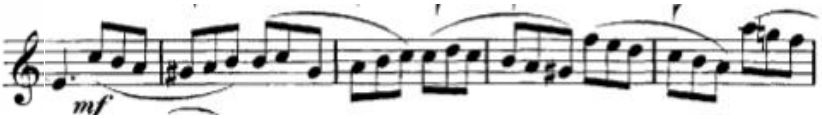


第2楽章　Romanze, Ziemlich langsam

第1主題　OboeとVioloncello solo



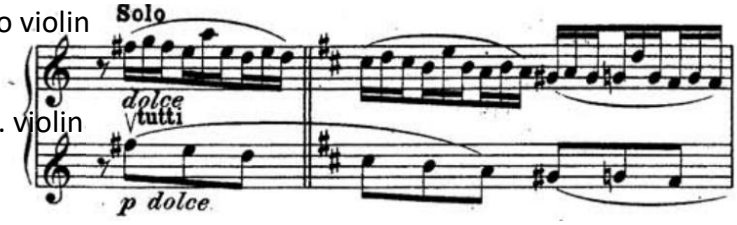
第2主題　第1楽章の序奏部の動機



中間部 Violin solo 3連符

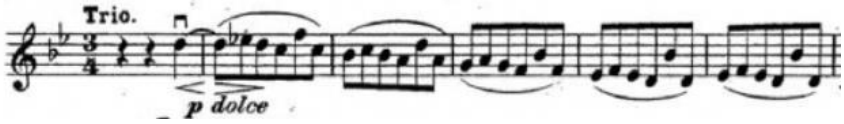
Solo violin

1st. violin



第3楽章　Scherzo : Presto

中間部 Trio 弦合奏



第4楽章　Largo – Finale. Allegro vivace / Langsam - Lebhaft

第1楽章の第1主題の動機を使った　第4楽章の導入部